

第21回研修会講演①

レファレンス能力を高める “選書という行為”

大学コンソーシアム京都 井上 真琴

1. 同志社大学での「選書」の政策ポイント

同志社大学図書館で選書業務の統括をしていましたが、この図書館の美点は（と敢えていいます）学習図書館として位置づけられ、学内の研究室図書館とは区別して運営されている点です。学習図書費（約2億円）と研究図書費（約10億円）が峻別され、教員からの予算の蚕食もなく、学習支援一辺倒の選書が可能でした。

そして、選書をするのは職員。具体的には、皆で築きあげた「選択基準」をもとに、6～7名で構成された資料収集作業部会をおき、全点見計いによる選書体制が敷かれています。本日は、レファレンスの視点から選書を照射するのが目的ですので、詳細は省き、図書館員の情報リテラシーの能力開発とレファレンス能力の向上に、選書という行為の何が、どのように役立つのか、それを明らかにしていきたいと思えます。

2. 選書の実際：どう評価能力をつけるのか。

2-1) シラバスの読みみや『日本全国書誌』の読み

選書の担当者、つまり資料収集作業部会のメンバーに必須とされる作業があります。学習支援を念頭に選書するには、なによりも自学で展開されるカリキュラムを知り、シラバスを熟読することが不可避です。特に、シラバスを読むことは、自学で展開されている学問の内容と体系を知り、教育のためにどのような資料が求められているのか、そのニーズを確認する好資料といえましょう。

次に、メンバーには『日本全国書誌』を「読む」ことが課せられます。

基本的には、灰色文献をピックアップして寄贈依頼、購入するための作業ですが、これは皆様にお薦めする、レファレンス能力アップの最強の方法です。半年続ければ見違えるような能力になります。あんな書誌事項をひたすら読むなんて砂を噛むような作業だ、いったい何をどう読めばよいかさっぱりわからない、との批判もです。しかし、大串夏身先生が言われるように、目録は小説を読むように読む。私は、恋文を読むつもりで読め、と言います。例えば、「官公庁出版物」の[文部科学省]の欄。教育関係の政府報告書が並びますが、編集がベネッセだったりします。よくみると委託調査。どのような機関が委託を受け、調査を実施しているのか。それがわかるだけでも、ウェブ検索の際にヒットしたサイトからどの機関を優先して見ればよいか、という判断ができます。情報資源スペシャリストの専門性を涵養する材料と

いうほかありません。ぜひお試しください。

2-2 見計い選書

雑誌（購読開始時のみ）も含めて、全点見計い選書をするのも本当に有効です。現物をみることで、入門書には200頁くらいの、19cmくらいの資料が多いとか、研究書でもインデクスが人名・事項・地名など詳細につけてあるものは使いよいか、レファレンスでこんな質問があった場合に役に立ちそうだ、などと考えながら選んでいくことが血肉になります。

できれば、「この本はこの授業に役立つそうだ」という視点だけではなく、この本を使えば、こんな研究や調査が展開できそうだ、くらいの視野で選書すべきです。常に使われ方や展開を意識しながら、資料に触れる。この意識の有無が、情報リテラシーやレファレンスの能力が身につくかどうかの分水嶺になります。

選書の基盤となるのは、自分たちなりに資料の評価フレームを築きあげることです。同志社大学では先の「選択基準」が図書の評価フレームで、別に雑誌・新聞用の評価フレーム、データベースの評価フレームもあります。

総合雑誌の新規購読の可否を検討する場合、執筆者が他の学会誌等で発表した論文数や、新聞の「論壇時評」等でその雑誌が掲載する記事が取り上げられた回数を見る、などの評価項目を設定しています。評価フレームづくりは建築模型と一緒に、美しく作る事が目的ではなく、作る過程で様々な問題点に気づくためにあるのです。

3. レファレンスサービス実践との関係は

レファレンスの現場では、選書で得た知識が縦横無尽に利用できます。

「この論文が欲しいが、掲載の紀要雑誌が図書館にない。ILLで取り寄せてほしい」「その先生が纏められた単行本に、きっと再録されていますよ」見計い選書で本を手にしたとき、最終頁にある初出一覧を見ているので、既発表の論文が再度まとめられて単行本になるのを知っているからこそできる技です。

「ゆとり教育について調査しているが、何から読めばよいかかわからない。CiNiiで物凄い数がヒットします」「過去の重要論文を解説付で再録した“リーディングス”と呼ばれる図書を使えばどうでしょうか」。これらは選書作業の経験がレファレンスの現場で活かされている例です。情報リテラシーやレファレンス能力向上にも連動する「二毛作」の選書を進めていきたいものです。